市民談話室

投稿をお待ちしています。この「市民談話室」は、市民の皆さんの意見交換の場です。テーマは自由です。あなたがふだん思っていることをお書きになって気軽にお寄せください。紙面の都合上、文を短くすることがあります。あて先は、〒九五〇―一二　白根市大字白根一二三五　白根市役所企画財政課広報広聴係です。

雪と新潟人

〝対立〟すれば、いやな雪だが

田中　聡さん（下八枚・高校生・18歳）

雪がすごく積もった。外では朝早くから除雪車が行き交う。新潟に住んでいれば、雪とは離れられない。みんな「いやだね」と言いながらも、そんな気持ちの裏では、ほんとうに雪がいやだと思っているのだろうか。

人間は、西洋では自然と〝対立〟し、日本では〝融合〟してきたと、今では悪名高き「現代社会」で習った。いつかしら、日本人は「生態系」を破壊し「公害」を発生させはじめた。つまり、日本人は自然と〝対立〟するようになった。

最近では逆に、日本人本来の自然との〝融合〟を求めて「日本文化」を取り戻そうとしている。

確かに、何メートルも積もった雪の中で生活するのは大変だ。だから雪と〝対立〟し、除雪車が行き交う。片隅には何メートルにも積まれた汚い姿の雪。今度はこれがじゃまだとばかり、用水路に捨てる。いやだいやだと言いながら。一方、たんぼに自然と積もった雪は、冷たい早朝ともなれば、まぶしいくらい美しい。

「除雪をやめよ」と言うのではない。「偉そうなこと言うな」と言われてもしかたない。けども、雪というのは何が何でもいやなのかな？

僕もりっぱな受験生。大学は地元か県外かと迷っている。雪が降らない東京は確かに便利だけど、何か魅力を感じない。

雪がいやだという新潟人は、ただ交通機関がどうのこうのと思うためで、ちょっとした現代的新潟人のエゴイズムにすぎないのではないかと思う。そもそも日本人の〝融合〟精神となれば、雪自体いやだと思わないのではないだろうか。寺田寅彦だって、雪の結晶の姿に取り付かれたのだし……。

とかまあ、偉いことを書きましたが、今日、果たして「電車は遅れやしないか。テストの時間に間に合うかな」と思う某高校、一受験生の考えです。

たんぼなどに降り積もった雪は、晴れた日にはまぶしいくらいに輝く

わが住む町

外から眺めると魅力たっぷり

鈴木衛二さん（皐月町・教員・50歳）

外国に出て初めて日本のよさがわかるといいます。私は、白根に生まれて白根に住んで五十年、いちばん白根を知らない一人かもしれません。その間、東京で過ごした四年以外は、すべてこの町で暮らしました。

それでも、ここ十二、三年は新潟市近郷のK町、また、お隣りのS町に通勤するようになり、少しは、わが住む町を外から眺める機会を持つようになりました。

一直線に伸びた八号線の幾何学的印象は、新鮮で快い。若々しい工業団地とカラフルなニュータウン構想などは、青年都市のイメージを増幅する。この町に住む夢をはぐくむ。

そのせいかどうか、勤務校から白根への就職者も年々増えています。昨年は、新潟市に次いで第二位でした。彼らの地元よりも多い数です。今年はどうでしょう。ともあれ、わが町に生徒の来ることは、いいことです。

市民文芸

俳句

米山に登る一歩の蕨煮著　玉木　長吉

色あせて花びら淋ししくらめん　渡辺　勤

川柳

豆を撒くこの掌で福を掴みたい　吉川　未吉

灯付く二階の窓の受験生　木野　米雄

焼き印を捺された下駄の怪古敲　渡辺　ミヨ

父の鉄拳を噛みしめている臭歯　今井　七郎

雪国の地酒が友を呼んでいる　今井　タエ

一回のくしゃみでモヤシッ子の厚着　岡村　清

町工場いまだ判捺す出勤簿　織田　セツ

まずくしゃみして新築のコマーシャル　後藤　マサノ

謂られる歴は達者な時が花　佐藤　トミノ

反発の言葉を喉で止める嫁　佐藤　ヨキ

マル優の総人口が急に減り　高橋祐四雄

離婚判捺して寞んだ夫婦像　竹石　甚五

退屈をする暇のない芸達者　田中　成子

一日一笑!!

積極的に笑えば楽しい毎日に

須田一則さん（日の出町・青果業・35歳）

皆さん、一日一回は笑いましょう。そうすれば非常に楽しい一日を送れます。

〝笑う門には福来る〟ということわざがありますが、もっとも皮肉な人は「何を言っているんだい。笑うから福が来るのではない。福が来るから、つまりうれしいことがあるから笑うんです」と言われるかもしれませんが、それがそうではないのです。

ですから、積極的に笑いましょう。待っていてはいけないのです。

笑うということは健康にもいいんですよ。おなかの筋肉が出来てきて、血液の循環もよくなってきますし、女性には美容によろしいですよ。笑うと顔にしわが増えるからいやだとお思いでしょうが、これはまちがいだそうで、かえって、ホルモンの関係でつやが出てくるそうです。

さあ皆さん、気楽に笑いましょう。

健康づくり

保健センターで楽しく汗を流す

小林キミイさん（諏訪木五・59歳）

健康増進体操の日として、保健センターを借りて、わがグループが運動をすることになってから一年が過ぎました。月に二回ほどの集会です。

のどかな春の夕暮れ。まだ暮れやらぬ初夏の夕べ。「みんなそろってどちらへ」などと声かけられます。また、つるべ落としの秋の夕暮れにも、とっぷり暮れたたんぼ道をむせるように懐しい稲の香りをかぎながら、そっと穂に手を触れてみたりして通った幾夜か……。

今流行のシェイプ・アップとはほど遠いけれど、二十人ばかりの会員が心を開き「和」を保ちながら続けています。

健康増進室で思い思いの器具を使って汗を流し、終わってからの総合体操の楽しいこと。またまた一汗かいているうちに、もう使用時間が切れてしまいます。公共物の使用とて時間厳守です。九時半の時計を見ながら早々に解散します。

熱帯夜には帰るともなく、街灯の下でひとときディスカッションをすることもあります。

冬将軍を迎え、みんなががんばり通すかが問題。なにしろ五十歳から六十歳までの熟老年会員ですから。いいえ、がんばると思います。「自分の健康は自分で守る」をモットーとする会ですから……。あなたもやってみませんか。

短歌

消雪のはじける水に湯気見えて　輝く雪に凍き虹映ゆ　中村　家

ひらひらと心清めし初雪に　したしみ想ふ現在の我には　大野タケノ

老いて来た父の歩調に合せる子　田村　恒夫

白鳥の瞳にあたたかな雪ばかり　長井　徳市

水子地蔵七つ子抱いて目を回す　中村　尚治

自立して男に負けぬくしゃみする　西条　ムラ

義理て捺す印が財産灰にする　野内熊太郎

けちんぼが募金を避ける廻り道　早川　英男

子に不自由させない寡婦の手内職　山岡　フミ

雪らしい予報に街がくしゃみする　吉川　彩

時代が移り変わって、降りしきる雪の中を歩く人の姿、光景はあまり変わらない

私の思い出　昔のわが街

一面銀世界の中　足元をしっかり見つめ

語る人
武藤　稔さん
（下赤渋・建設業・44歳）

私の住む下赤渋は、旧大郷村であり、信濃川沿いで、上手に位置した部落です。現在、世帯数が47、在住者250人（1月1日）の活気ある部落です。

このような部落にも、信濃川沿いを走る県道と、西笠巻から大野に抜ける県道があり、私が幼少のころはまだ未舗装で、新潟交通が除雪していました。そして、その間には部落の生活の道、市道が横たわり、毎冬、雪が降っては踏みつけ歩く毎日が繰り返されてきた道でした。

部落の者は町へ出る時、どんよりと重い灰色の空の下、身をかがめ重い荷物を背負い、一面銀世界の中、1本のこの道をただ足元だけを見つめ、歩いていきました。親の足元を子供が見失わないようじっと見つめて歩く――そんな姿が今もなつかしく思い出されます。

固く踏みつけられ、幾重にも重なった足跡……。それぞれどんな思いで歩いたものであろうか。今ではりっぱな舗装道路になり、当時の面影はありませんが、あの貧しかったころは、しっかり自分の足元(人生)を見つめていたと思います。